



# はじめに

本書はIrohahook.comに掲載された記事のうち、特に学生の方から読まれたものを編集しなおしたものです。本書のために加筆している記事もいくつかあります。

# 人類史上最も偉大な哲学者7人

大学で倫理と哲学を学んだ私が偉大に感じる学者を紹介します。ここに名前があがっている人物は多かれ少なかれ私たちの人生に影響を与えていると考えられます。

## 1 ソクラテス

数えきれないほど戦争を重ねてもまだ人間の歴史が続いているのは、人間が傲慢さに隠れて「無知の知」を知っているからではないかと思います。

ソクラテスの「無知の知」は、自分の知らない状態、自分の至っていない状態、自分の愚かな状態をソクラテス以降の歴史に生きるほぼすべての人間に、直接的あるいは間接的に教えています。戦争をくりかえしても平和が訪れて、人間が真に壊滅的な結果をむかえていないのも、「私たちは基本的に愚かである。したがって核兵器を使って戦争しようものなら、これまで作りあげてきたすべての歴史は終わってしまう」と直感できているからです。

多くの市民が歴史に対して抱くこの危機感と責任こそ、ソクラテスの残した最大の功績かもしれない。

## 2 プラトン

私は理系の学生でしたが、古典と哲学に興味があったため、大学一年生のときに西洋哲学史という授業を受けました。一人の教授が四人しか受講していない寂れた教室で訴えていたことは、「西洋哲学はプラトン哲学の翻訳である」ということです。

当時、残念なことに東洋哲学に興味がなく、西洋哲学史と科学史に傾倒していたため、教授の思想はどこかしっくり胸奥に残りました。

かなりの飛躍になりますが、プラトンのイデア論は時を超えて大陸合理論とイギリス経験論にも影響していると考えられます。イデアは人間と真実を区別しますが、その考え方は物心二元論の原型とも考えられるからです。

また、プラトンの国家論は現代社会に適用できます。高校倫理の始めに出てくるように、プラトンは人間の魂を理性、気概、欲望に分けて、それぞれを担当する社会的階級を定義しました。

資本主義と市場原理は、私たちの欲望を自由という言葉で正当化し、価格と生産を最小限の規制によって調整しようとしします。統治者（国と政府）という理性が、生産者（市民と企業）という欲望を抑えているわけです。

プラトンは理性、気概、欲望に必要な徳は知恵、勇気、節制であると説きました。つまり国と政府に必要なものは知恵であり、警察と軍に必要なものは勇気であり、私たちと企業に必要なものは節制です。

プラトンの主張のように、各階級が徳を実現して初めて全体の正義が成り立つのであれば、市民である私たちはやはり社会全体に責任を持っているということになる。サルトルの考えを引用するまでもなく、プラトンの国家論は一人一人のアンガージュマンを要求しています。

## 3 老子

私が個人的に最も関心を持っている東洋の思想家は老子です。吉田兼好の徒然草にあるような淡泊な世界観に加えて、作為と悪意という人間独自の賢しさを断罪するような主張は、「（私を含む）今の若い世代」にとって傾聴に値するテーマといえるでしょう。

ニーチェの永劫回帰と力への意志から自分の人生を考えるで述べているように、社会は（インターネットの普及にとともに）無機的な方向に流れていると考えられます。若い世代が労働に憎悪を抱く原因の一つは、組織の大規模化にともなう労働の事務化にあります。

官僚主義が広がる現代において、粘土をこねて器を作るような作業は端っこに追いやられて、紙にサインするような作業が中心となっています。私たちの人生の半分以上は労働に縛られているため、紙にサインするという無機的で冷たい作業が人生の半分を占めることになります。

若い世代はこの傾向に本能的な危機感を抱いていると考えられます。

ここで老子の次の言葉を紹介します。

無為自然 ... 知恵を捨てて自然に従う

柔弱謙下 ... 謙虚・柔和に生きる

歴史は常に知識と技術を求める方向に流れてきましたが、老子の思想はこれに水をさして、人間の知恵など取るに足らないと唱えます。

労働がこれほど冷淡になったのも、技術が過剰に進歩して社会が複雑になったからでしょう。逆に考えれば、進歩を逆行すれば労働に有機的な味わいが出てくるかもしれない。

#### 4 デカルト

デカルトの物心二元論と演繹法は人間の持っている合理性を正当化するうえで外せないと考えられますが、ここではデカルトの残した「理性の扱い方」について考えます。デカルトは『精神指導の規則』で理性を次のように扱うように説いている。

明らかであるか考慮しなさい

分類しなさい

不足を考慮しなさい

まずは単純なものを考えなさい

以上の四つを念頭に置く と建設的な議論ができると考えられます。

#### 5 カント

カントの道徳のポイントは定言命法です。

仮言命法 ... もし～ならば、～しなさい

定言命法 ... ～しなさい

例えば人を傷つけてはいけないというルールはなぜ正しいのでしょうか。人を傷つけたら、警察に捕まるから？ それとも、その人が傷つくから？

どのように考えるかで、その人の道徳がわかる。警察に捕まるから、という仮定によってルールをルールたらしめる方法を仮言命法といいます。カントによれば仮言命法は道徳ではない。

人を傷つけてはいけないのは、人を傷つけてはいけないからだ、という自分が自身を正当化しているとき、そのあり方を定言命法といいます。カントはこの定言命法を道徳と考えました。

この考え方は小学校の道徳の時間で教えるべきだと私は思います。物を盗んではいけない、人を傷つけてはいけない、人をいじめてはいけない、といったルールの根拠を考えさせたいうえで、その根拠がルール自体にあることが道徳であると教えることで、その人間の道徳は養われるのではないのでしょうか？

#### 6 ダーウィン

ダーウィンは『種の起源』で進化論を説いた学者で、哲学者という見方をしない人もいますが、進化論という概念が社会と歴史に与えた影響ははかりしれないため、このリストに加えました。

進化論においては、環境に適応できない存在は滅びるとされます。これほど恐ろしい概念があるのでしょうか？ そして私たちは多くの場面でこの考えが正しいことをつきつけられています。望まれない商品を作りつづける会社はつぶれるように。

学校で、会社で、社会で、あるいは家で、この考えは人間の領域にまで適用できる普遍的な崇高さを持ってしまっています。

個人が生き方を考えるうえで第一に意識しなければいけない法則が、この適者生存です。私は個人的に、適者生存はあらゆる思想で最も重大であると考えています。

またこの適者生存（あるいは自然淘汰）の法則は、人間が生物である宿命を免れないことも間接的に訴えているでしょう。

ソクラテスとプラトンが人間について考察してから、私たちはどこか自分の宿命を忘れてしまっているところがあります。

ベーコンが「知は力なり」と唱えたように、あるいはアダム・スミスが人間の欲望と自由を正当化したように、さらにはバスケルが「人間は考える葦である」と言ったように、人間という生き物は人間を人間として考える癖を持って

います。

しかし私たちは人間である前に、生物です。

環境に適応できない個人は滅んでしまうのです。

## 7 ユング

ユングは心理学に多大な貢献を果たした学者で、代表的な理論の一つに「集合的無意識」があります。

私たちは自分を国民であると考えています。私は日本人であるため、私という人間性は日本の影響を受けていると考えられますが、ユングの集合的無意識は、心のさらに奥には国や民族の壁を超えた何かがあると主張します。

人類が普遍的に抱くイメージに、アニマ、アニムス、グレートマザーがあります。アニマは男性が女性に抱くイメージ、アニムスは女性が男性に抱くイメージ、グレートマザーは生と死のイメージです。

民族を超えて人が共通した観念を持っているという考えは、私たちは戦争を止められるという希望につながるでしょう。無意識レベルでは私たちはつながっているのだから。

# 科学者と哲学者、数学と哲学

人名	分野	功績
アリストテレス	哲学	論理学、自然哲学
ケプラー	天文学	ケプラーの法則
ガリレイ	天文学	地動説
デカルト	物理・数学	慣性の法則、数式表記、デカルト座標
ニュートン	物理・数学	万有引力の法則、微分積分
パスカル	物理・数学	パスカルの原理、確率論
オイラー	物理・数学	微分積分、幾何学、流体力学
ラグランジュ	物理・数学	解析力学
ラプラス	物理・数学	天体力学、ラプラス変換
ガウス	物理・数学	代数学、整数論、解析学、幾何学、電磁気学
ハミルトン	物理・数学	解析力学
ストークス	物理・数学	ストークスの定理
マクスウェル	物理	マクスウェル方程式
アインシュタイン	物理	相対性理論
フェルマー	数学	フェルマーの定理
関孝和	数学	微分積分、行列
ライプニッツ	数学	微分積分、行列
アーベル	数学	楕円関数
ガロア	数学	ガロア理論
リーマン	数学	リーマン幾何学、リーマン積分、リーマン予想
ポアンカレ	数学	位相幾何学、ポアンカレ予想
ヴェイユ	数学	代数幾何学

上にあげた表は高校で扱わない「科学者リスト」です。

ここにあげた科学者の多くは、実は哲学者でもあります。特にニュートン、パスカル、デカルトの三人は高校倫理でも出てきます。

17世紀までは哲学、数学、物理はかなり近い学問だったと考えられます。人間の関心事は古代から中世にかけて神学と形而上学にありましたが、科学が十分に発達していないため、科学的な思想もその根底には神学と形而上学があったと考えられます。

16～17世紀になると思想の最先端は機械論的自然観に集約されていきます。ケプラーやガリレイの実験などによって、それ以前の形而上学的・抽象的な神的世界は「今目前にある具体的な世界」ともいうべき世界とつながり、自然をあいまいな言葉でなく数学的厳密性によって記述されうるという観念が芽生えたのです。

数学は究極の領域で宗教的側面をもちます。オイラー（数学者）は無神論的な百科全書派を批判したという逸話が伝えられていますが、オイラーは誰よりも数学の論理を知っていたにもかかわらずキリスト教を信じていました。

数学の究極的な問いは「この世界はどうなっているのか？」です。それぞれの学問的領域に収まっている間、数学者はおそらくこの問題を伏せるように自らの直観と論理に邁進していることでしょう。しかし心の底では世界への疑問、大胆に言い換えれば神への疑問があると考えられます。

# ベネディクトの「恥の文化と罪の文化」

ベネディクト（ルース・ベネディクト）はアメリカの文化人類学者で倫理の教科書に出てきます。代表作『菊と刀』で日本文化を詳しく分析しています。

高校倫理ではベネディクトによる日本と西洋の根本的な違いに触れます。それは日本分화가恥の文化であり、西洋文化が罪の文化であるという東西世界の二項対立です。

日本文化 ... 恥の文化

西洋文化 ... 罪の文化

日本ではトラブルを抱えた芸能人や政治家は記者会見を開いて「この度は世間をお騒がせしまして大変申し訳ありません」といった謝罪をします。当事者の間で謝罪するのみならず、テレビや雑誌といったメディアを通じて日本社会全体に向けて謝罪する。この社会性からわかるように日本人は世間という抽象的な何かをいつも意識し、問題が起きた時は問題そのものというよりは問題によって生じる自分のマイナス評価を気にするところがあります。

ミスや問題についてどう向き合うか？ 問題そのものに向き合うか、それとも問題によって生じた自分の恥に向き合うか。そこに日本人と西洋人の根本的な違いがあります。

ベネディクトは西洋文化を罪の分化と表現していますが、西洋人は世間の評価よりも問題そのものを第一に意識します。これは西洋の個人主義的な側面があると考えられます。ここからは筆者の考えになりますが、おそらくキリスト教の影響もあるでしょう。キリスト教の原罪という考え方と個人主義的風潮がある種の自己完結型意識（罪の意識）を生んでいる可能性はあるでしょう。

## 現代社会では恥と罪の両方が必要

以下も筆者の持論と考え方になります。現代社会はインターネットを通じて世界が一つにつながっています。一人の発言はいろいろなメディアを経ていろいろな方向に拡散し、不用意な発言をすれば自分の知らないところから批判がやってくる。インターネットにおける称賛や批判の多くは匿名であるため、私たちにとってインターネットはあたかも『大きな監視者』になっています。

高校倫理で習うフーコー（『狂気の歴史』や『監獄の誕生』を著した哲学者）は近代社会をパノプティコンと表現しました。パノプティコンは中心に監視者、その周りに囚人が閉じこめられている円形状の監獄のことで、フーコーの考えを借りれば、現代のインターネット社会はまさにパノプティコンと言えるかもしれません。中心に何者かよくわからないインターネットという監視者がいて、その周りに私たちがいる。何かミスをおかしたら、監視者としてのインターネットが私たちを容赦なく攻撃する。

こうした監視社会では『恥』は自分の盾になります。「こんなことをしたら、あんなふうに言われるだろうな」という恥によって自分の行動を律することができるからです。恥という概念を忘れてしまったら、自暴自棄になっておかしい行動をしてインターネットという監視者から容赦なく批判されてしまうかもしれない。それは結局、自分にとって損になる。

一方、恥という建前上の概念だけにとらわれていると問題の本質が見えなくなる。「こんなことをしたら、あんなふうに言われるだろうな」ではなく「こんなことをするのはなぜいけないのか」という発想こそが、問題の本質的な解決につながり、やがて自分の成長につながります。インターネット社会では自立と責任、そして自分の頭で物事を理解したり解決したりする問題解決能力が求められますが、この罪の意識はその能力の向上に役立つでしょう。



# 実存主義

キルケゴールとニーチェはとてもわかりやすい思想家ですが、ヤスパーズとハイデガーが似ているようなそうでないような、少しわかりづらい思想を持っています。どちらも死という残酷な運命（ヤスパーズはこれを限界状況といい、ハイデガーは死に至る存在という）を通して、実存に目覚めるとしています。

ヤスパーズがハイデガーと色分けされる点は『実存の交わり』という概念です。ヤスパーズは人と人の関わり合いが重要であると考えています。病気になったら誰かの助けがいるし、大切な時間を誰かと共有したいと願う。人は一人で生きていけないということを強く主張した哲学者がヤスパーズです。

そしてサルトルがこの関係性をもっと広く、社会的に広げます。サルトルは各人に社会参加を求めますが、しかしその理由はヤスパーズ的な本質と少しずれます。人は社会を変えるだけの力を持ち、そのための責任があるからアン・ガージュマンを説いたのであって、ヤスパーズの愛し合いながらの戦いという本質はありません。

実存主義の中ではニーチェとサルトルが最もわかりやすいかもしれません。サルトルの思想はすべて『実存は本質に先立つ』という根っこからきています。だからこそこの言葉は重い。サルトルが無神論的な立場をとっているのもこの言葉に現れています。なぜか少し見てみましょう。

サルトルの『実存は本質に先立つ』とは、人間は自分で自分を決められる存在であるということです。人間以外のモノの多くは、実は本質が実存に先立っています。あなたが今使っているスマホやパソコンを考えてください。これらは「私たちの暮らしを便利にするために生まれた」ものです。便利にするために生まれたのです。生まれてから便利なものに変化したわけではありません。

商品とはことごとく、ある思想、思惑、願望などから生まれています。「こんなものが欲しい、だから作る」という流れですね。

モノにおいて本質が実存に先立つのは、モノは人間という神に『仕えるもの』だから。仕えるものは主人のためになにかをするわけで、それをするために生まれてきます。もしここで本当に神がいたらどうか？ 人は神に逆らえず、神の為すがままの存在で、これはちょうどパソコンが私たちに逆らえず、私たちの為すがままの存在であることと同じ。

しかし私たちは自分で行動できます。私たちは生まれて直後は自分が何者であるかわからず、生きていく過程で「自分とはなにか」「自分はどうすべきか」を決定していく。実存があって、本質が後からついてくる。

だからサルトルは無神論的に理論を説明します。もし神がいたら、私たちはパソコンと同じように本質の後に実存がついてくる。

サルトルの人間像は実存の後に本質を加えていく自由な存在です。自由の刑に処せられているとは、自由だからこそ自分で自分を決めないといけないということ。実存はあるが、本質はないという存在だからこそですね。この辺はかなり合理的です。そして自由には当然責任がつきまとう。自分で自分を変えてなにか問題が起きたら、それは誰のせいでもなく自分のせい。

# 永劫回帰

永劫回帰はあらゆることが無限にくりかえされる世の理をさします。仏教の輪廻転生と根本的に異なる概念です。

ニーチェにとって人生は意味のないもので、この瞬間のこの状態は永遠にくりかえされます。

世界がマス目のようにできていて、有限個のマスに有限個の物体が一つ一つ存在しているとすれば、そしてまた時間が無限に続くとすれば、あらゆる状態が永遠にくりかえされると考えてもおかしくありません。

真の意味で同じ人生、同じ状態が無限に続くという考えは、ミクロの物質の運動がランダムに引き起こされるという事実から否定されるかもしれない。

しかし自分の人生も人間の歴史も、認識される範囲において（自分の人生であれば生きている時間において）同じような出来事をくりかえしています。

人の人生は失敗があつて成功がある。ある意味、人は生きている間「失敗と成功」というループを回っているだけと考えることもできます。スケールを大きくして人間の歴史を見るとやはり「戦争と平和」というループを回っています。

# 力への意志

永劫回帰という生の無意味さから、ニーチェはその無意味を受け止める力強さが重要であると説きます。この力を持っている者が超人です。

ここからは筆者の偏見と無知が入り乱れているため、読むときは注意してください。

歴史の無意味さ、そして人生の無意味さを超越しようと、キリスト教的伝統を脱して新しい価値を創造した「超人」は、アメリカであると私は考えています。

資本主義的な消費社会にいる現代人がマルクーゼの主張したように「一次元的人間」になっているとすれば、あるいはフロムの主張したように「自由から逃走」しているとすれば、私たちの精神的豊かさは世代を経ていくにつれてある種「無意味化」していると言えるかもしれない。

現代社会の本質は、物質的豊かさの追求と労働に対する苦痛の増大ではないかと私は考えています。社会の歴史がそのように流れているならば、人間の人生から有機的な多様性が失われて、無機的な冷たさが伝染していくかもしれない。

この抽象的な変化に気づいたとき、私たちは本質的に、自分の人生が社会の要求する画一性に閉じこめられたナンセンスであると直感し、絶望するでしょう。この絶望は永劫回帰による絶望と本質的に同じであるため、ニーチェを知っている人は力への意志をハッと思い出して、

それでも自分はこの無意味さを超えるしかないのだ

という考えにいたるわけです。そして現在、このアイデアに突き動かされて資本主義という自由をまっすぐ進んでいる存在、すなわち超人がいます。それがアメリカ合衆国です。

アメリカは資本主義と自由の正しさを経済発展という具体的な形で証明しています。そのあり方を好ましく思うが、そうでなかろうが、またアメリカの発展を支えている人たちがニーチェのいうナンセンスな人生を送っていようが、国民の総体としての国はこの二百年間持続的に発展し、いまだにその衰えは見えません。

アメリカという国がGDPという数値を年々積み上げていく歴史は無機적であり、なんのために発展しているか、なにを目指しているのかわからなく見えてしまうときがあります。アメリカの発展はニーチェのナンセンスを体現しており、同時にニーチェの求める新しき創造を具現してもいます。

今こうしてニーチェの評を発信できているのも、アメリカという国から生まれたインターネットが存在するためです。インターネットという新しい世界の創造に最も貢献した国はアメリカです。

アメリカの発展、あるいは歴史の発展は本質的に無意味です。あのときはよかった、技術が進歩していないときはよかった、ひるがえって今はナンセンスだ、これ以上科学が進歩してなにになるのだ、と考えてもいいでしょう。確かに進歩も発展もナンセンスと言えばナンセンスです。

しかしおそらく人間の歴史はナンセンスのくりかえしにすぎず、そのナンセンスの上に、誰かが力への意志をもぎとって強者となり、超人となり、新しい価値を作っていくのです。

ある人はそれをナンセンスといいます、ある人はそれをナンセンスであり、同時に創造と呼ぶ。この違いをどう考えるかによって、実は私たち一人一人の人生は変わっていきます。

# 終わりに

倫理と哲学はそれ自体の研究よりも、自身の人生への活かし方の研究のほうが有用です。私たちは絶えまない変化と厳しさにさらされて日々悩んでいます、ただぼうっと悩むのではなく、その悩みの根拠と問題解決への緒を探すように社会から暗に強制されているところそのものも憂鬱の元凶になっています。

哲学は歴史が作ったものです。そして生き抜くすべは歴史の中に隠されています。歴史から免れない私たちの生への不安は、哲学の教養と解釈によって真に解放されるでしょう。